

# 『分別と多感』にみるリアリズムの諸相

山根木 加名子

## I リアリズムとは

ジョージ・エリオット、E. M. フォースター、ヘンリー・ジェイムズら、滔々と流れるイギリス小説の大河「リアリズム」の川上にジェイン・オースティン（1775-1817）は位置している。リアリズムとは「目に見えるものしか描かないこと」、つまり「観察」に基づき、人生の諸相を能う限り忠実に再現することである。だが、このリアリティは「現実」の文字どおりのコピーでは決してない。雑多な対象から作家が価値観のふるいにかけて選び取った、作家自身にとっての真実なリアリティ、いわば相対的リアリティなのである。「私はなまの現実を、つまりカメラが捕えるような光景を見たいとは思わぬ。私の見たいものは光景の背後にあるより深い現実（deeper reality）...の姿である。」<sup>1</sup>

このトマス・ハーディのリアリズムへのマニフェストはおそらく先達オースティンにも当てはまるだろうが、彼女の「ディーパー・リアリティ」、ないしは「客観的相関物」<sup>オブジェクティブ・コレラティブ</sup>とは一体何であるのか。「田舎の三、四軒の家庭」<sup>2</sup>を材料に丹念に織り上げられるオースティン文学でのリアリティとは、「人生の真実なる描写」とそこに映し出される「人間性の真理」であ

<sup>1</sup> Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1962), p. 185. 上島建吉訳。

<sup>2</sup> James Edward Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1926), p. 96.

る。

さて、『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811)で組上りにのぼる材料はダッシュウッド家の妙齡の姉妹エリナとメアリアンである。1795年、『エリナとメアリアン』としてスタートした若書きの書簡体小説は、2年後、姉の「分別」と妹の「多感」を暗示する『分別と多感』と改題され、さらに推敲を重ねた後、1811年、世に出された。(二つの特質は必ずしも両極化できないが。)そこで、まず妹メアリアンの人間教育を中心とするメアリアン・プロットにみるリアリズムに、次いでエリナの「言葉」と「対話」にみるリアリズムに着目し、写実主義者オースティンが「人生と人間性の真実」をいかにして芸術化していくかを明らかにしてみたい。

## II メアリアン・プロットにみるリアリズム

『分別と多感』はメアリアンとエリナの恋の行方を主筋と副筋に、古典主義的均衡を保って展開する。だがメアリアン・プロットに注目するとき、顕著なリアリズムの特性に気づく。イアン・ワットによれば、モダン・リアリズムはデカルト、ロックに始まる哲学上のリアリズムと類似する。「我思う、ゆえに我あり」を出発点とするデカルトは、真理の探求を過去の思想の伝統から独立した全く個人的なものとみなすが、小説の主要基準もまた「個人的経験にとっての真理」である。こうして「真理は個人により、その五感を通して発見される」という見地に立つモダン・リアリズムにおいて、その中心をなすのはあくまで「個人的経験」である。<sup>3</sup>

さて『分別と多感』において、その核となるのが「メアリアンの個人的経験」である。個人の経験の総体をリーチとショートは「リアリティ・モ

<sup>3</sup> Ian Watt, *The Rise of the Novel* (London: Chatto & Windus, 1974), pp. 12-13.

デル) (model of reality)と呼び、「我々の頭の中にあり、自分の住む世界の实情だと信じ込んでいるすべてのものだ」と定義する。<sup>4</sup> いまだ17年に満たぬ人生で、わずかな付き合いと書物だけから知識を得てきたメアリアンのリアリティ・モデルは、当然のことながらきわめて限られている。この「うぶな娘」(ingénue)が「恋と挫折」という直接的体験をし、さらに「姉エリナの恋とブランドン大佐の古傷」という間接的体験を経て、より広い現実認識と真理に目覚め、リアリティ・モデルを修正し拡大していく。これが当作品におけるリアリズムの枠組みである。

そこで『分別と多感』をメアリアンの個人的経験を通してのリアリティ・モデル拡大のストーリーとして読むことにより、まずメアリアン・プロットにおけるリアリズムを考えていこうと思う。

### Ⅲ メアリアンのリアリティ・モデルの問題点

17年足らずの人生の大半を、地方社会の一隅でファミリー・サークル中心に過ごしてきたメアリアンは、乏しい人生体験しか持たない。そのうえ彼女の知識は、専らスコットやクーパーなどロマンスやロマン主義的書物から得られたことから、多分にロマン主義、感情主義への偏向をみせる。こうしたメアリアンの限定され、いびつなリアリティ・モデルが引き起こすのが、ウイロヴィとの恋と挫折である。

この恋はまず、あまりに多感なメアリアンの性格ゆえに性急な激しさを帯びる。二つ違いの姉エリナが「エクサラント・ヘッド」と「エクサラント・ハート」を併せ持ち、感情を抑制する術を心得ているのに対し、メアリアンは姉に劣らぬ資質を持ちながら、感情の横溢という点で大きく相違

---

<sup>4</sup> Geoffrey N. Leech & Michael H. Short, *Style in Fiction* (London: Longman, 1981), p. 125.

している。

長女エリナは…すぐれた理解力と冷静な判断の持主で、わずか19歳ではあったが母ダッシュウッド夫人の相談相手となり、たびたびその熱し易い気性の調整役をつとめ、無思慮に走らせないようにした。彼女はすぐれた心情の持主だった。愛情に富み感情は豊かであったが、それを制御する術を知っていた。その術を母はこれから習い覚えねばならなかったし、妹の一人はそんな術は覚えまいと決心していた。

その妹メアリアンは才能の点では、決してエリナにひけをとらなかった。物わかりもよく賢かったが、すべてのことに熱情的であった。喜びも悲しみも極端に走り、ほどほどを知らなかった。寛大で優しく興味をひく娘だったが、ただ一つ思慮深さにだけは欠けていた。<sup>5</sup>

この唯一にして最大の違いが、姉とは正反対にメアリアンを性急で激しい恋へと駆り立てる。

さらに恋のもう一つの特徴は、これがロマンス的想像力の産物であることだ。ある日、転んで足をくじいた彼女は、通りすがりの青年に抱きかかえられて家まで運ばれる。この事件がメアリアン好みのロマンスの筋書きにぴったりであるのに加えて、救い主ウイロビィが、想像の世界で理想像として描いていた通りの、快活かつ気品ある物腰を備えた眉目秀麗の青年紳士だったことから、彼女はたちまち恋に落ちる。こうして、相手の人格を吟味するまもなく始まった恋は、リアリティの裏づけを欠く「想像力の所産」である。したがって、その始まりから不毛な終りをはらんでいるものと言えよう。

---

<sup>5</sup> Jane Austen, *Sense and Sensibility* (1811; Harmondsworth: Penguin, 1986), p. 38. 以下、同書からの引用は本文中に頁数のみを記す。

さて、ロマンチックな想像力で自らに目隠しして、ウイロビィの本性というリアリティを見ることを拒んだメアリアンは、同様に社会的リアリティにも目をそむける。この事実をもっともよく示すのは「婚約」に対する態度である。物語の背景をなす18世紀社会で、「婚約」は結婚への一過程以上の意義を持っていた。そこでは「リスペクタビリティ」を中心価値に、それに沿った「分別」と「礼節」ある行動が尊ばれた。とりわけ女性に関しては、コンダクト・ブック（淑女教育のための行儀作法書）が次々に刊行されたことでも分かるように、ひととき厳しいマナーとモラルが要求された。恋愛においても同様であった。まず個人的愛情に対する「社会的おすみつき」としての「婚約」が発表され、晴れて後、ようやくカップルは節度ある態度で愛情を世間に示すことが許された。だが、感情至上主義のメアリアンは恋愛においても愛情のみを求め、社会的慣習や形式を一切顧慮しようとしなない。ウイロビィとの婚約の有無をめぐる周囲が気をもむにもかかわらず、「私自身は、厳粛な法律上の契約が私達を互いに結び合わせたかのように、あの方とお厳かに婚約しているものと感じていた」

(206) と述べて、正式な婚約を求めないのもそのためである。また同じ理由で、婚約前の男女にはタブーである公然とした手紙のやりとり、洗礼名で呼ばせる、二人きりでアリナムを見に行くなどして、社会的慣習やコードを平然と犯す。

「婚約」に対するこうしたメアリアンの態度を、姉エリナと比べてみると興味深い。ある事実や現象をどう理解し解釈するかは、受け手の知識と経験にかかってくるが、「婚約」へのエリナの受け止め方は彼女の価値観を表わすと同時に、リアリティ・モデルの広さの証ともなる。メアリアンと違い、エリナは「婚約」を重視する。「婚約」は個人的愛情関係を社会で是認させるもの、即ち、個人的関係に社会的意味を付与するものである。したがって婚約もしていない男性と浮名を流すことは社会のコードに違反

し、「浮気女」(flirt)「男たらし」(jilt)のそしりを受けることになり、最悪の場合は「墮落した女」(fallen woman)として社会から追放の憂き目にあろう。ブランドン大佐の初恋の相手イライザがその例であり、『高慢と偏見』のベネット家の末娘リディアも、すんでのことに破滅に至るところだった。もともと社会的規範や礼節を尊ぶ性向に加えて、エリナは優れた分別と理解力によってこうした社会的現実を認識しているがゆえに、メアリアンとウイロビィの婚約の有無について神経をとがらせるのである。

#### Ⅳ メアリアンのリアリティ・モデルの拡大

ところで第1部11章で、ブランドン大佐を相手にエリナがメアリアンのあまりに多感な傾向を憂えて、次のように語るシーンがある。

「もう2、3年もすれば、妹も常識と観察に基づいてもっと理性的なものごとを判断できるようになるでしょう。」(86)

「もっと世間を知るようになれば、あの人にとってたいそうためになるものと期待しておりますの。」(87)

エリナが求めるこうした妹のリアリティ・モデルの拡大は、やがて失恋の悲しみと引き替えにもたらされる。想像力という脆弱な基盤の上に築かれたメアリアンの恋は、ウイロビィが多額の持参金付きの令嬢ミス・グレイと結婚するに及んで悲劇的結末を迎える。「理想の君」というフィルターを通して彼を見てきたメアリアンも、実像を直視しロマンチックな迷夢から覚めざるを得ない。この経験にさらにエリナとブランドン大佐の体験が加わって、彼女をリアリティへの開眼、そして新生へと導いていく。

まず妹の人間教育への範となるエリナの体験とは、エドワードとの恋愛である。メアリアンがありったけの感受性をぶつけてウイロビィへの恋に突き進んでいた頃、エリナは深い愛情を理性と礼節の衣に押し隠してエドワードを慕い続ける。その彼が若気の至りで結んだ秘密の婚約の末、ルーシーと結婚せざるを得なくなることから、いったんは妹同様、失恋の憂き目にあう。だが、同じ悲しみに対する姉妹の態度はまさに好対照を描く。メアリアンが悲嘆に溺れ、沈黙と孤独と無為に逃げ込んで自らはもちろんのこと家族にも悲しみを広げるのに対し、エリナはひたすら感情を抑えて普段と変わらぬ生活を送る。この平静さは決して感情の乏しさゆえではない。周囲に対する強い義務感——家族に心配をかけまいという義務感、恋敵ルーシーではあるものの打ち明けられたからにはエドワードとの婚約の秘密を守らねば、という義務感——からくるものである。しかも超人的な自制心は絶え間のない辛い努力の賜物である。

「[[あなたは] 私 [エリナ] が深く感じたことがないと思っているのね。...もしも私にだって感情があるとわかってくれたら、ずっと苦しんできたことをきっと今はわかってくれるわね。」(276)

そんな姉の言葉に怜悧で多感なメアリアンが心打たれぬはずはない。利己的な感情に耽っていた我が身を反省し、自分を抑え他人への思いやりを持って社会と調和して生きていくことの大切さ、現実認識に目覚めるのである。

一方ブランドン大佐の場合は、青春時代の悲劇的体験を通してメアリアンに影響を与える。35歳という年齢にしていまだに独身をかこっている彼は、メアリアンにとって当初、憐れみと軽悔の対象であった。だがオースティンにおいては、正しく年を重ねた年長者は経験と知識の豊富さ、判断

と理解力の的確さから往々にして「メンートル」となる。エマにとってのナイトリー同様、ブランドン大佐もまた18歳年下のメアリアンにとって「広く世間を見、よく読書してきた思慮深い」(82) 男性として、メンートルの役割を担う。ナイトリーは鋭い洞察と判断力によってエマの師となるが、大佐は一つの事実を伝えることで彼女を導くことになる。

彼が独身を押し通す原因になったのは初恋の女性イライザとの悲恋だが、不幸な結婚のすえ身を持ち崩した彼女は私生児を産み、借金のため投獄され、ついには病気で若死にする。大佐は母親の死後、その娘を後見するが、彼女を誘惑して捨てたのがウイロビィである。

この事実は、ウイロビィの実像を明らかにしてメアリアンを迷夢から覚まさせると同時に、イライザの例によってメアリアンにあり得べき未来を擬似体験させる。「うぶな娘」から「墮落した女」への転落のお決まりのコースを辿った彼女は、性格・感情の激しさなどメアリアンと酷似している。したがって、オールド・ロマンス的な荒唐無稽さでいささか真実味には欠けるものの、このエピソードはメアリアンが過った結婚をした場合陥るかも知れない危険への教訓として重要であり、ひいては彼女の人生に新たな知識と深みを加えてくれる。

こうしてメアリアンは自らの直接的体験と、エリナとブランドン大佐の間接的体験により、人間教育を施される。そして古い自己の精神的死を意味する病癒えた後は、身勝手な感情に耽って他人への義務を怠っていた自分を反省し、今後は「感情を抑制して気質を改めていく (improve)」(353) と、けなげに誓う。

以上、メアリアン・プロットは、「個人的経験」を通してリアリティ・モデルの拡大をはかる、というリアリズムの枠組みを持つことが判明した。この過程でオースティンは、感情を制御して理性に従わせ、他者への配慮をもって社会と調和して生きる必要性を説く。即ち、これこそが真理であ



り、「知性を最高位とする人間の諸能力の調和」<sup>6</sup> を目指すリアリスト、かつ新古典主義者オースティンの姿勢の表明であると言えよう。

## V 言葉にみるリアリズム

ところで「言葉の文学」と称されるオースティン文学において、言葉使いの巧みさ適切さは他に例をみないほどだ。ベネット夫人やコリンズはむろんのこと、『分別と多感』でもミス・スティールの口癖“beau”は、愚かで軽薄な性格をコミックに露呈する。この「言葉に地金が顔を出す」<sup>7</sup> 傾向は、メアリアンとエリナの場合も同様である。即ち、姉妹それぞれの言葉が、性格・価値観・人生観を表わす「ヴァリュー・ピクチャー」となる。

感嘆詞や強調語などオーバーな表現を多用し、“extasy”や“rapture”を乱発するメアリアンの言語パターンは、「悲しみも喜びも極端に走る」直情径行型の多感さを裏づけるものである。

対照的に姉エリナ言葉は、感情で染められない写実性を特徴とする。冒頭で述べたように、リアリズムとは観察に基づき、人生の諸相をできる限り忠実に再現しようとするものである。即ち、〈事実と理性〉を重んじる態度だが、エリナ像はこれを反映する。エドワードの真価について妹に語った言葉を引用してみよう。

「あの方の、**分別**と**善良**さについては... たびたびお会いして打ち解けた話をしたことのある人なら、どなたも疑う余地はないことよ。ただ**恥ずかしがり屋**でしょっちゅう黙っていらっしゃるから、**理解力**があ**って行ないも正しい方**だということがわからないのね... 私はた

<sup>6</sup> Ifor Evans, *A Short History of English Literature* (1940; Harmondsworth: Penguin, 1981), p. 235.

<sup>7</sup> ピエール・クースティアス、ジャン・P・ブチ、ジャン・レイモン、『19世紀のイギリス小説』（小池滋、臼田昭訳、南雲堂、1986）、p. 126.

びたびお会いしてお気持ちをみてとったり、文学や趣味のお話も伺ったわ。大体とても見聞が広く本もたいそう好きだし、想像力は生き生きしていて観察は正しく、ご趣味も洗練されているわ。<sup>マナーズ</sup>態度やお姿と同じように、どの方面での才能もあの方を知れば知るほどよくわかってきます。」(52、傍点筆者)

恋する乙女の言葉であるゆえ、いくぶん差し引いて考えねばならないのは当然だが、ここにはエリナの二つの特性が明らかにされている。一つは冷静な観察に基づいて相手の価値を判断する態度、今一つは人物評価を道徳的基準に求めることである。まずエドワードを知るために彼によく会い、感情を「みきわめる」という手順を踏む。その結果見出した「分別」「善良さ」「理解力」「行ないの正しさ」といった知的、道徳的価値がエドワードへの愛情の基盤となる。こうしたエリナのリアリスティックで理性的な選択を、メアリアンのロマンチックで感性的な選択と比較すると、両者の差が一目瞭然であろう。

エドワードに対してだけでなく、妹へのウイロビィの真意を確かめる際にも、エリナは同様に「自分自身の観察力」で彼の行動を「注視する」(watch, 178)。つまりエリナのライト・モチーフは「観察」(observe, watch)と「認識」(perceive)である。ところで、リーチとショートは実人生のできごとを描写する方法として、物質的フィジカル・アスペクト面に比重を置くものと抽象的アブストラクト・アスペクト面に比重を置くものとの二つを挙げる。このうちオースティンにとって最も重要なリアリティは後者、即ち、社会的、道徳的、心理的生活の諸相を描くことにあると指摘する。そしてこれを反映する語彙が、“perceive”や“possess”“be married to”などだと言う。<sup>8</sup> 確かに、“perceive”をはじめ、“decorum” “propriety” “sense” “principles”

<sup>8</sup> Leech & Short, p. 180, p. 185.

“manners”など、社会的、道徳的語彙をちりばめられたエリナが作者の代弁者であることを思うと、オースティンの関心は主として抽象的面でのリアリティにあると言えよう。

言葉にみるリアリズムの第二の特徴は、ロマンティズムとの対比である。これは第4章、エリナがエドワードへの心情を吐露する場面で、メアリアンとの意見の衝突により明示される。

彼女 [エリナ] は言った。「あの方をととも立派だと思い、尊敬申し上げ、好ましく思っていることは否定しないわ。」

ここでメアリアンは憤って叫んだ——

「尊敬するですって (Esteem him)! 好ましいですって (Like him)! 何て冷たい言いぐさでしょう! いいえ、冷たいなんてものじゃないわ! 熱い気持ちを持つのを恥ずかしいとでも思っているのね。二度とそんな言葉をお使いになろうものなら、すぐにもこの部屋を出ていくわよ、よくって。」(53)

愛することが、即、“extasy”“rapture”へとエスカレートしていくメアリアンにとっては、“esteem”“like”という紋切り型かつ中立的な言葉でしか愛情を語らぬ姉の態度は、冷酷無比で許し難いものである。そんな妹に苦笑しつつ、エリナはこう弁解する。

「ごめんなさい。そんなにも冷静に自分の気持ちを話したからといって、あなたを怒らすつもりはなかったのよ。私の気持ちは口にしたよりもっと強いものだと思ってちょうだい。つまり、あの方の値打ちや、あの方が好意を持って下さっているという憶測——そう思いたいのだけれど——にふさわしい程度、決して軽率でも愚かでもない程度に強いものだと。」(53)

ロマンチスト、メアリアンの場合、激しい感情はそれに匹敵する激しい言葉を得て表現される、即ち、〈感情〉と〈言葉〉が等価であるのに対し、エリナの場合は、強い〈感情〉は制御され、冷静な〈言葉〉と〈理性〉の枠内にとどめられるのだ。

彼女〔オースティン〕は感情の力に無知だったわけでも軽蔑していたわけでもない...ただそれは制御されるべきであり、その表現を書きしるすにあたっては知的であるべきだと信じていた...。<sup>9</sup>

ここにもまた、理性を感性の上位に置く「リアリズムの信奉者」オースティンの見解が明らかである。

ところで、リーチとショートは「会話におけるリアリズム」に論及して、実生活での会話を構成するのは“fluency”(流暢さ)、及び“non-fluency”だと主張する。<sup>10</sup> “non-fluency”とは〈口ごもり〉〈繰り返し〉〈統語上の変則〉などだが、<sup>11</sup> エリナの会話にもこうした〈口ごもり〉や〈沈黙〉が観察される。エドワードをめぐる恋のライバル、ルーシーと彼女との間に交わされる対話を聞いてみよう。ルーシーはエリナに、エドワードとの4年越しの婚約を打明けるふりをして、彼への優先権を主張し、彼女を牽制する。

エリナは二、三とき沈黙していた。耳にしたことの驚きが大きすぎて、初めは口がきけなかった。だが、ようやく用心して口を開き、驚きと心配を何とかうまく押し隠して冷静に言った。「婚約されてどのくらいですか?」(153)

<sup>9</sup> Walter Allen, *The English Novel* (New York: Dutton, 1954), pp. 125–26.

<sup>10</sup> Leech & Short, pp. 160–61.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 161.

また、エドワードがくれたという肖像画をルーシーから見せられ、お返しに自分のも用意するつもりだ、と勝ち誇って聞かされたときも、

「そうですわね」と、エリナは冷静に答えた。二人は押し黙って二、三歩歩いた。(155)

強靱な自制心と礼節の持主であるエリナは、冷静な言葉を装って感情を抑えようとする。しかし言葉にならない〈沈黙〉こそが彼女の本心を物語る。ところで、小説における〈沈黙の言葉〉をピエール・マシュレイはフロイトの無意識と同視する。

本の中で言葉は、ある沈黙により語られる...なぜなら何かを語るためには、あることは言われてはならないからだ。フロイトはこの〈沈黙の言葉〉に新たな場所を与え、これを逆説的に「無意識」と名づけた。<sup>12</sup>

精神分析の誕生宣言というべきフロイトの『夢判断』(1900)刊行の100年も前に、既に人間心理に鋭い洞察を示した、心理学者オースティンの卓越性がここに見られる。

以上のように、エリナの言葉と会話を分析してきた結果、オースティンの反ロマン主義、並びに、人間の社会的、道徳的、心理的諸相におけるリアリティへの関心や“non-fluency”をも含めたリアルな会話への関心が散見される。

---

<sup>12</sup> Pierre Macherey, *A Theory of Literary Production*, trans. Geoffrey Wall (London, Henley, Boston: Routledge & Kegan Paul, 1978), p. 85.

## Ⅵ お わ り に

『分別と多感』の芸術作品としての完成度については、疑問視する向きも多い。オースティン研究の第一人者の一人、ウォルトン・リッツも、こう酷評する。

[これは] 若書きの作品に後年つぎはぎしたものだが、元の構成に見られる未熟な対照法をうまく手直しできなかった。<sup>13</sup>

リッツの指摘する「未熟な対照法」とは、表題が示す「分別」と「多感」という対照的特質が、エリナとメアリアンに図式的に分極化したことである。『高慢と偏見』同様、対立概念を並置するこうした対照法は、個々の特性を際立たせ、かつ作品に勢いを与えるものとして、18世紀教訓小説などでしばしば用いられた。が反面、両概念が分極化し、人物はステレオタイプとなって、性格や行動の精妙さや柔軟性を損なう恐れがあった。リッツはこうした対照法の欠点を『分別と多感』に見出し、「オースティンの主要作品中、最も興味を欠く」出来ばえだと裁断する。<sup>14</sup>

この主張を全面的に支持するものではないが、『高慢と偏見』や『エマ』に比べると、できばえの点で劣るのは事実である。だが、プロット、及び言葉を中心にリアリズムの問題を考察していくと、その後のオースティン作品に共通する基本姿勢が、既にして明確にうかがえる。即ち、経験により自己を拡大していく個人とその真実でリアルな描写、人間性の道徳的、社会的、心理的リアリティへの興味、感性より理性、想像力より事実を重

<sup>13</sup> Jane Austen, *Sense and Sensibility* (Harmondsworth: Penguin, 1986), p. 2.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 1.

んじる態度、といったものが。晩年の『説得』などではロマン主義へのスタンスを変えていくオースティンだが、第一作『分別と多感』は、18世紀「理性の時代」の申し子である写実主義者オースティンの姿を、くっきりと映している。

1993. 1. 29. 受理